

(様式)

平成 28 年度 新技術等実証展示ほ 成果情報

いちご「スカイベリー」の品質向上技術の確立

要約

摘花及び玉出しを行うことにより、大玉果発生率が極めて高く、ロス果が減少し、果実糖度のバラツキがなくなった。収量は1割減少し、ほ場労働時間は1割増加するものの、スカイベリーのブランド化には必須要件であると思われた。

○ 展示のねらい

スカイベリーは、リーディングブランドとしての安定した品質・食味確保が課題がある。収穫時期や果房内でも食味のバラツキがあり、葉陰の着色不良や障害果など出荷ロスも多いため、摘花や玉出しによる果実品質の向上と管理作業の労働改善効果を実証する。

摘花区は葉を倒伏防止線で抑え、食味の低下する2番果や裾玉を摘花し、花房当たり4果とした。対照区は慣行栽培（無摘花）とした。

右写真：摘花した二次腋花房

○ 主な成果

(1) 糖度は、摘花処理により頂花房～三次腋花房までの花房毎の平均が 9.4～10.2%と高く、バラツキも1%以下と小さかった。対照区は、全期間を通して8%を下回る果実が発生し、バラツキも1.3%と大きかった。

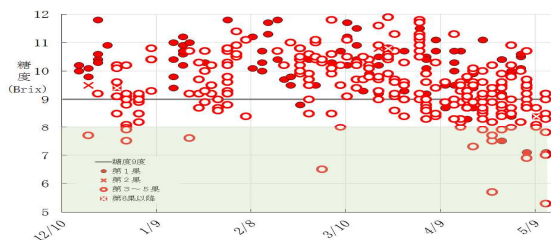


図1 摘花区の収穫日毎糖度

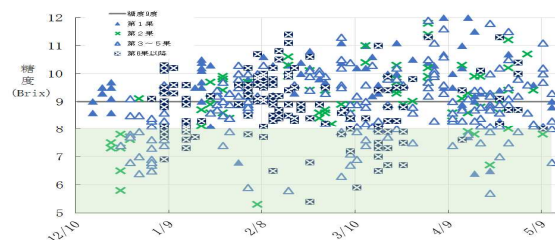


図2 対照区の収穫日毎糖度

- (2) 1果重は、摘花処理で頂花房及び一次腋花房が平均果重 40 g を越え、二次腋花房までは対照区に比べ 143% と大玉になった。
- (3) 収穫果数は、頂花房～二次腋花房までは対照区の 48% であったが、摘花区は収穫が1段階進み、総果数は対照区の 72% となった。
- (4) 総収量は、摘花区は対照区に比べ大玉になったことから 90% に至った。
- (5) 出荷ロスは、摘花処理によりマダラ果、キズ果、クスマ果及び小玉果の発生が減少した。
- (6) ほ場労働時間は、年内は摘花作業分が増えたが、1月以降は摘花により収穫果数が少ないことから収穫を含めた作業時間が徐々に減少し、対照区の 111% であった。

○ 今後の方向性

- ・摘花処理によって果実品質は高まるが、単価等経済評価が求められる。
- ・ブランド化に向けて生産組織としての取組が必要である。

実施機関：下都賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：壬生町

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315